

福岡城下町3

—福岡城下町遺跡第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1462 集

2022

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。その中でも中央区は鴻臚館が置かれ、遣唐使や大陸の商人、僧などが行き来する大陸と交流の拠点となり、近世には福岡城の城下町として発展し、貴重な遺跡が存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する福岡城下町遺跡の発掘調査報告書はホテル建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では近世から近代の集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、事業者様をはじめとして多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

例 言

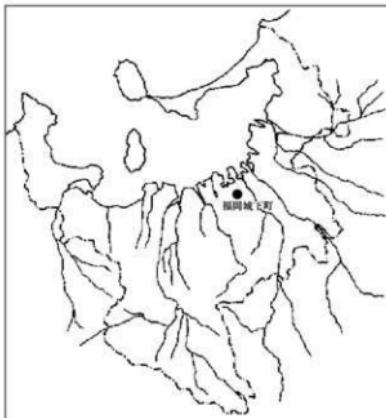
- 本報告書は中央区大名2丁目279番、280番のホテル建設工事に伴って2019年6月10日から2019年9月13日にかけて発掘調査を行った福岡城下町遺跡第3次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市経済観光文化局の屋山洋が担当した。
- 遺構実測・製図等は屋山が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 貿易陶磁の分類は太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-(2000年)太宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	1902	遺跡番号	401332888	分布地図番号	舞鶴60
調査地地番	福岡市中央区大名2丁目279番、280番				
開発面積	412.20 m ²	調査面積	319 m ²	調査原因	ホテル建設
調査期間	20190610 ~ 20190913			担当者	屋山洋

福岡城下町 3

－福岡城下町遺跡第3次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書1462集



遺跡略号 FUM-3

調査番号 1902

2022

福岡市教育委員会

目次

I.はじめ	1	2) 溝	8
II.調査の記録	1	3) 祭祀遺構	15
1 調査の経過	1	4) 土坑	15
2 調査の概要	3	5) その他の出土遺物	30
3 遺構と遺物	3	4 小結	30
1) 整地層	3		

挿図

第1図 遺跡分布図 (1/25,000)	2	第12図 祭祀遺構実測図2 (1/10・1/20・1/40)	17
第2図 調査地点位置図 (1/4,000)	2	第13図 祭祀遺構出土遺物実測図 (1/3)	18
第3図 調査範囲図 (1/200)	3	第14図 1060・2115実測図 (1/20)	19
第4図 第1面全体図 (1/120)	4	第15図 1007・1052実測図 (1/20)	20
第5図 第2面全体図 (1/120)	5	第16図 土坑実測図1 (1/40)	21
第6図 土層A、土層B南側実測図 (1/20)	7	第17図 土坑実測図2 (1/40)	22
第7図 土層B北側・C実測図 (1/20・1/40)	9	第18図 土坑出土遺物実測図1 (1/3)	23
第8図 SD2067実測図 (1/60)	12	第19図 土坑出土遺物実測図2 (1/3・1/4)	25
第9図 土層D実測図 (1/40)	13	第20図 土坑出土遺物実測図3 (1/3)	26
第10図 SD2067土層実測図 (1/20)	13	第21図 土坑出土遺物実測図4 (1/3)	27
第11図 祭祀遺構実測図1 (1/10)	16	第22図 その他出土遺物実測図 (1/3・2/3)	29

Fig1 土層A	6	Fig14 SD1060	19
Fig2 土層Bの一部	8	Fig15 2115	19
Fig3 1022近世初頭生活面	10	Fig16 SK1007	20
Fig4 炭化物層露出状況	10	Fig17 SK1052遺物出土状況	20
Fig5 土層C	11	Fig18 SK1021	21
Fig6 I 区盛土赤土露出状況	11	Fig19 SK1032	21
Fig7 SD2067土層	14	Fig20 SK1045	21
Fig8 1040	16	Fig21 SK2050	22
Fig9 1065	16	Fig22 SK2074	22
Fig10 1076	16	Fig23-1 SK2074魚骨出土状況	22
Fig11 1057	17	Fig23-2 SK2074エイ・サメ類椎骨出土状況	22
Fig12 1094	17	Fig24 SK2030遺物	28
Fig13 2028	17		

図版

図版1 1. I 区全景 (西から)	2. II 区1面全景 (南西から)
図版2 1. 1035礎石 (近代)	2. I 区砂丘面
図版3 1. II 区南西隅グリ石	2. II 区南西部盛土
図版4 1. SK2030遺物出土状況	2. SK2090土層 (北東から)
図版5 1. SK2006土層 (南から)	2. SE2120・2121掘り下げ状況
図版6 1. SD2067 (北から)	2. II 区下層調査トレンチ (南から)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成30年（2018年）10月24日付けで中央区大名2丁目279番、280番のホテル建設に伴う埋蔵文化財有無についての照会（30-2-710）が経済観光文化局埋蔵文化財課に提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である福岡城下町遺跡内に位置しているため平成30年11月9日に重機を使用した確認調査を行ったところ、地表下80cmから180cmの深さで近世の整地層と遺構が存在しているのを確認した。その結果を基に事業者側と協議を行い、令和元年（2019）6月10日から9月13日の期間で発掘調査を行った。調査期間中は土出し・水道・電気・調査事務所など事業者及び関係各位のご協力を頂いた。

2. 調査の組織

調査委託 株式会社 大和地所

調査主体 福岡市教育委員会（発掘調査 令和元年度：整理報告 令和2・3年度）

調査統括 福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

埋蔵文化財課長 普波 正人

同課調査第1係長 吉武 学（令和元・2年度）

本田浩二郎（令和3年度）

庶務 文化財活用課管理調整係 内藤 愛（令和3年度）

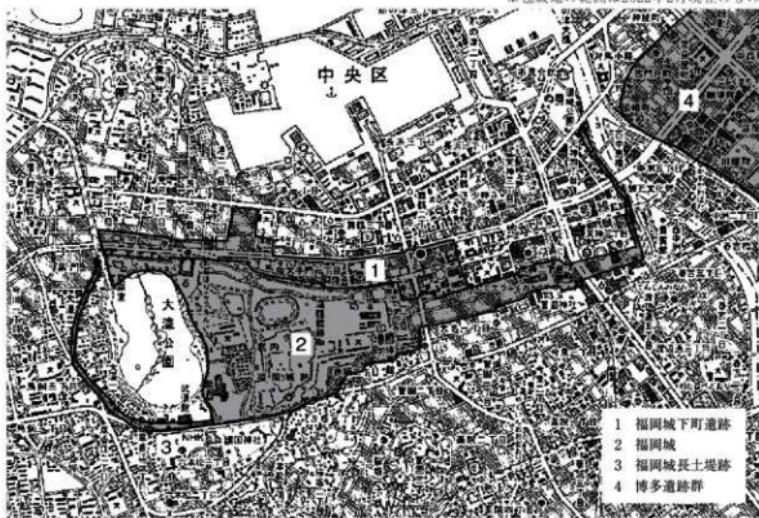
調査担当 埋蔵文化財課 屋山 洋

II. 調査の記録

1 調査の経過

申請地の敷地面積は4122m²で、掘削を伴わない南西部を除いた283.88m²を調査対象とした（第3図）。5月30・31日はコンクリガラなどが混じる表土鋤取りに立ち会い、6月10日の機材搬入後に擾乱掘りを開始した。廃土置き場の都合から調査区を南北に分け、北側のⅠ区から調査を始めた。Ⅰ区は既存建物基礎による擾乱が多くたが、擾乱部分にも井戸などの遺構が遺存している可能性があった。しかし重機による擾乱の掘り下げは残っている遺構を破壊するため手掘りで掘り下げたところ、ガラなどが多く量に含まれていたため掘り下げにくく10日近く費やした。調査では標高2.2m付近を第1面として調査を開始して焼土ブロック層と炭化粉堆積層を確認した。焼土ブロックは部分的に2層確認され、その間には礎石や柱穴などの遺構が遺存していた。焼土ブロック層の下には赤土と砂を交互に敷いた盛土層があり、焼土層から盛土上面までを第1面、盛土層上面から砂丘面までを第2面（標高2.6m）として調査を開始した。6月26日に1面目の全景写真を撮影し、2面目は7月12日に調査を終え7月16・17日で反転、18日からⅡ区の調査を開始した。1面目は標高2.5m（南西部は2.8m）とし1面目の全景を8月8日に撮影。2面目は2.2m前後を調査面としたが、井戸がかなり密集していたので3面目の砂丘面（標高2.0m前後）の調査は井戸が無い部分のトレンチ調査とした。9月10日に調査を終え、11・12日は土器洗い、13日に機材を撤収して調査を終了した。

※包囲地の範囲は2022年2月現在のもの

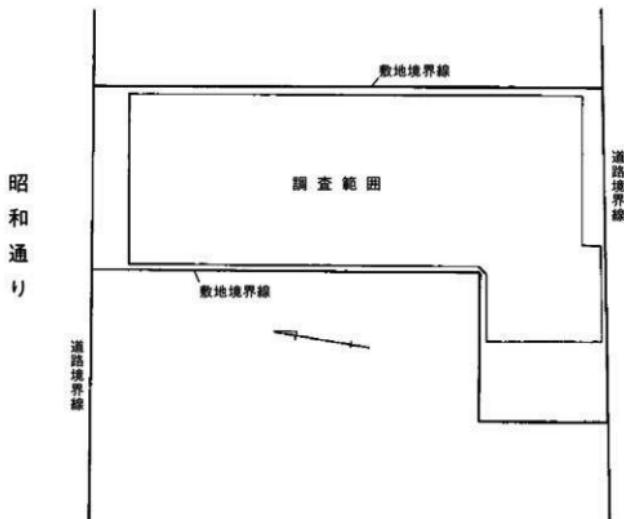


第1図 遺跡分布図 (1/25,000)

※■は福岡城下町の範囲（2022年2月現在）



第2図 調査地点位置図 (1/4,000)



第3図 調査範囲図 (1/200)

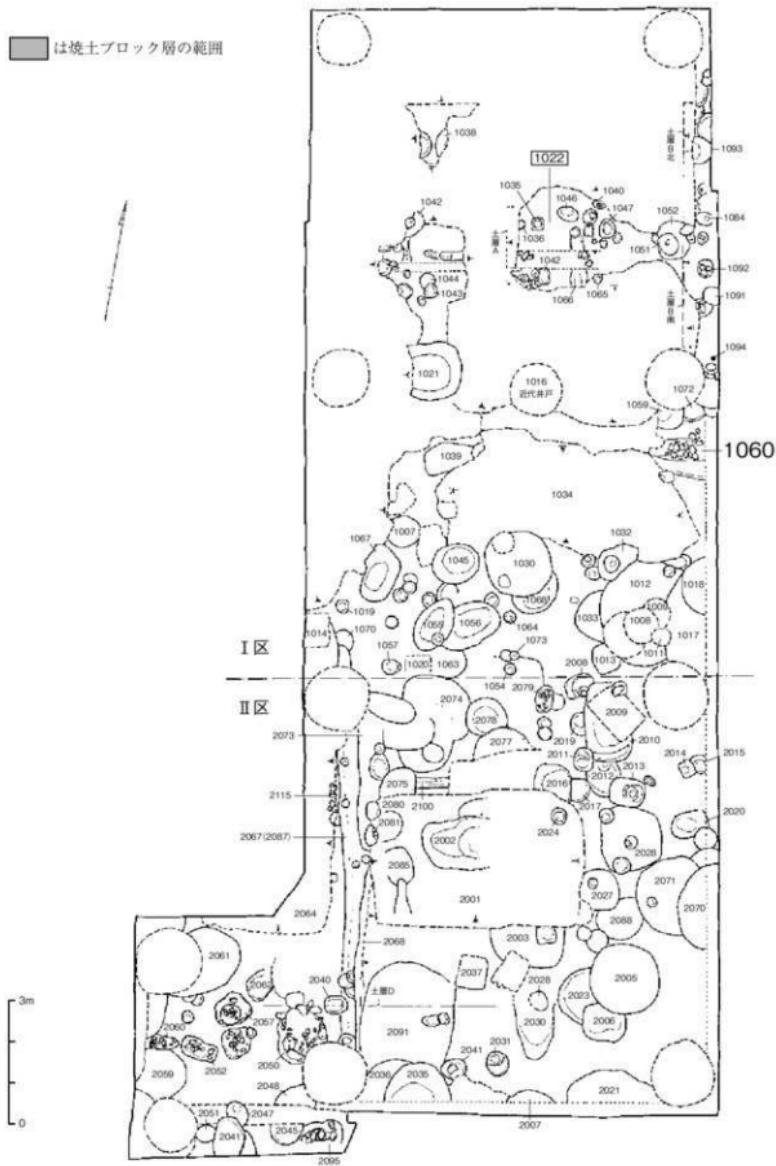
2 調査の概要

I 区は既存建物の基礎による削平をうけ近世町家建物の規模などは判明しなかったが、城下町造成時の盛土と火災後の整地層を確認することができた。火災後の整地層は焼土ブロックを主とした層とその下の炭化粉層で、これは博多遺跡176・187・194次や箱崎遺跡51・64・95・119次でも確認したが、焼土ブロックの一部に木舞孔が確認できたため土倉など土壁の残骸と思われ、その下の炭化粉層は火事の際に焼けた木材から出たものが堆積したものである。中近世絵画には火災の場面が多くあり、火災後の風景では焼けて炭化した柱だけが残った建物や強い火を受けた土蔵が描かれたものもあるが「春日権現駆除記絵」では地面がうっすらと黒くなっていて炭化物が薄く堆積しているのがうかがわれる。その後被熱で駄目になった土壁建物を壊して細かく砕き、平坦にならしたものと思われる。この焼土ブロック整地層は I 区では近代までそのまま露出した状態だった。図版5-1 の近代建物の礎石は焼土ブロック層の直上に乗っている。これは I 区が再建された建物の床下になり焼土ブロック層が露出していないからで、焼土ブロック層の下から建物の礎石や土師皿埋納遺構が良好な状態で出土したので、調査区の大半が削平をうけていたのは残念である。II 区は中央部が既存建物の地下室で破壊されていた他、近世から現代の井戸が全体に分布していて、近世の土坑の多くや生活面は削平されたものと思われる。また、II 区の調査中に来た2基の台風の影響か、地下水位が上昇していく砂丘面直下で湧水した(図版5-2)ため井戸の掘り下げができなかった。

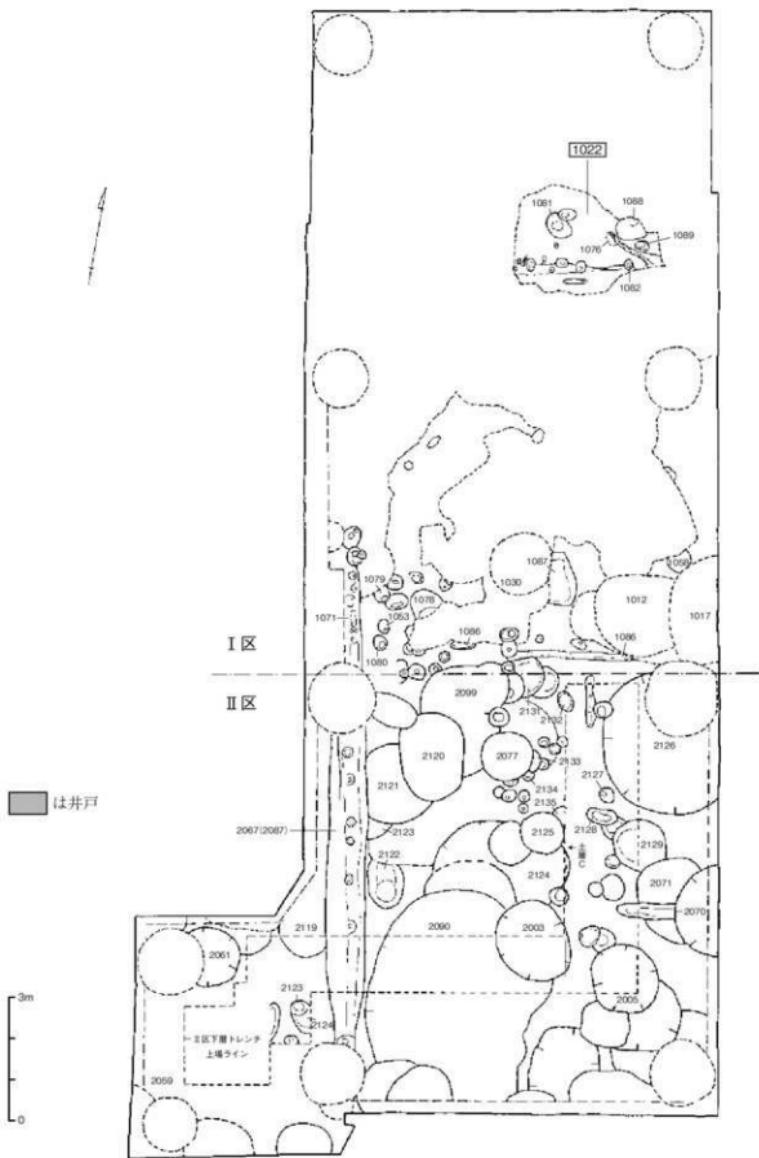
3 遺構と遺物

1) 整地層 調査で17世紀初頭の黒田長政による福岡城築城とともに行われた城下町造成時の盛土層とその後18世紀前半の火災後に行われたと思われる整地層を確認した。

■は焼土ブロック層の範囲



第4図 第1面全体図 (1/120)



第5図 第2面全体図 (1/120)

①城下町造成の盛土

福岡城下町遺跡は博多湾に面した砂丘上に位置する。福岡城築造に伴い北側の砂丘を造成し城下町を築いた。城下町の造成により幾つかの集落が移転している。発掘調査では実際に中世の遺物が出土しているが、点数は少なく規模等は不明である。これまでの4次の調査で盛土による嵩上げが確認されているが、唐人町近辺での開発に伴う試掘調査では直下で砂丘面に達して盛土は確認できなかったので、盛土が行われたのは城下町の一部である。盛土の工法はSD2067の東西で異なる。造成には福岡城がある丘陵の赤土が使用されており、築城時にてた残土を使用したものと推定される。SD2067の西側は、この赤土に砂丘の砂を均等に混ぜて50~60cmの盛土を行っている。地表面は砂混じりの赤土が見えていたはずで、その後土壤化がすすみ暗褐色を呈していた（図版3-2）。この工法は西側に140m程離れた1次や4次調査でも確認されており、SD2087から西側で広く使用されている。溝から東では砂丘面を平坦にした後に厚さ2~3cmの赤土を敷き、その上に厚さ5~10cmの砂を盛り、その上にもう一度厚さ3~4cmの赤土を敷き（Fig6 上層赤土露出状況）、更に10~20cm程砂を盛り、地表面は砂で覆われ盛土の痕跡が見えないなど西側とはかなり異なる。ただ現状では3次調査から東側で発掘調査が行われていないため、この工法が東側に広がるのか、部分的なものかは不明である。この工法の境のSD2067は底面で柱穴上の掘り込みや根石が確認されたため隙の基部であったと考えられる（一度立て直されている）が、盛土は全体を藩が主導するもので各屋敷の住民がするものではないと思われ、また、溝の東西どちらも町家で階層差なども考えられない。工法の違いは工事担当者の違いで担当地区の線引きを示す可能性も考えられるが、わざわざ堀で区切った理由は不明である。

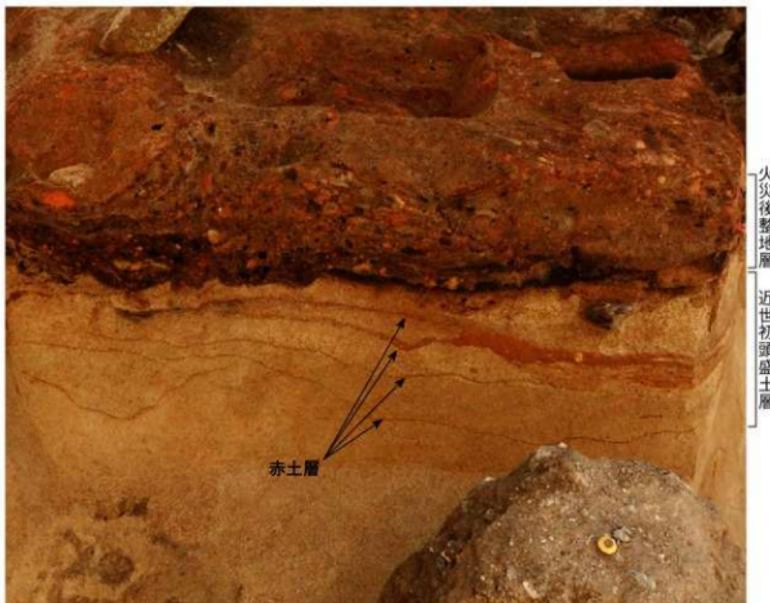


Fig1 土層A（西から）

土層A(1区)



1. 黄褐色砂質土、砂砾多く含む。柱状、レンズ状の漂移
2. 黄褐色砂質土、柱状の漂移
3. 黄褐色砂質土、漂移と黄褐色砂質土交じる
4. 黄褐色土、砂砾と黄褐色砂質土多く含む。泥炭は少
5. 黄褐色土、砂砾と黄褐色砂質土多く含む。泥炭は少
6. 黄褐色土、3箇所に述べて地上多く粘性物質が入る。
7. 黄褐色質土、風化物と地土プロック [lm] を多量に含む。黃褐色をレンズ状に含む
8. 黄褐色砂質土、風化物を含む
9. 黄褐色砂質土、風化物を含む
10. 上述の地土上にロック漂移層
11. 黄褐色土、風化物少含む
12. 黄褐色砂質土、20cmの間に多く風化物を含む
13. 黄褐色砂質土、近接漂移土
14. 黄色土。(赤土) 近接漂移土
15. 黄褐色砂
16. 黄色土
17. 黄色土。(赤土)
18. 沈積砂質土、地土の柱を含む
19. 黄褐色砂
20. 黄褐色砂
21. 黄褐色砂 砂を含む
22. 黄褐色砂、柱を含む

土層B(1区)



1. 黄褐色砂質土、地土プロック、風化物、地土柱が柱状に含む
2. 黄褐色砂質土、風化物
3. 黄色土、漂移じる
4. 黄褐色砂質土、漂移
5. 黄褐色砂質土の漂移、漂移は少
6. 風化物漂
7. 地上風化土の互層、層の厚さ58~100cm
8. 地上風化土の互層、層の厚さ85~20cm
9. 地上風化土の互層、漂移、地土プロック含む
10. 黄褐色砂
11. 黄褐色砂質土
12. 黄褐色砂質土
13. 黄褐色砂
14. 黄褐色砂
15. 黄色土
16. 黄色土
17. 黄褐色砂質土
18. 沈積砂質土、地土の柱を含む
19. 黄褐色砂
20. 黄褐色砂
21. 黄褐色砂 砂を含む
22. 黄褐色砂、柱を含む

第6図 土層A・土層B南側実測図(1/20)

②18世紀前半の整地

福岡城城下町は数度の大規模火災（数軒以上被害があった火災）に見舞われている。それぞれの火災範囲は明確ではないところもあるが3次調査区がある呉服町は判明しているだけで宝永5年（1708年）と享保10年（1725年）の2回ほど大規模火災に見舞われている（※）。調査ではI区で城下町造成の整地と近代の掘り込みの間に2枚の焼土ブロック整地層を確認した。この焼土ブロック整地層はその下層に薄い炭化粉層を伴う。これは火災時に燃えた木材から落ちた炭化粉が堆積したもので、火災後に焼けてひび割れた土壌や土倉を壊して整地したものが焼土ブロック層と考えられる。焼土ブロックは薬と思われる植物を多く含み、そのうちの幾つかで木舞孔を確認した。土層B（第7図上）では部分的に焼土ブロック整地層が重なっている（Fig2）。これが2度の火災の整地とすると1度目の火災後は焼土ブロック層がむき出しのままであったことが判る。これは2回目の火災後も同じでI区で確認した近代の礎石（図版5-1）は焼土ブロック層の上に乗っているが、建物境界と考えられるSD1060（第13図）から南側では焼土ブロック層はほぼ確認されてないことから、建物がなく露出した部分では焼土ブロックによる整地は行われなれど、SK2090で多量の焼土ブロックが出土したことから埋めて処理（海や川に廃棄されたものも多いと思われる）していたものと思われる。

※福岡市博物館宮野氏に教示いただいた。

2) 溝 1条の南北溝と3条の東西溝を確認した。

SD2067（第8図、図版6-1） 調査区の西端に沿う南北溝で現在の地割りに平行する。I区北側では攪乱で削平され、調査区内で確認できた長さは12.5mである。土層図では一度掘り返されており



Fig2 土層Bの一部（西から）

土層B北側 (I区)



Fig.2 実測部分

黒褐色土：炭酸鈣を主として地表面、地土ブロックを多く含む (2-4-7-8-10-12層を強調したもの)

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。風化物は多く含まれる。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。6-7層の間に白い風化物質を多く含む。骨材

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。14-15層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。16-17層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。18-19層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。20-21層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。22-23層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。24-25層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。26-27層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。28-29層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。30-31層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。32-33層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。34-35層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。36-37層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。38-39層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。40-41層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。42-43層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。44-45層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。46-47層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。50-51層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。52-53層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。54-55層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。56-57層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。58-59層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。60-61層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。62-63層に白い風化物質を多く含む。



黒褐色土：炭酸鈣を主とする。風化物は多く含む。風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。3-4層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。5-6層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。7-8層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。9-10層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。11-12層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。13-14層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。15-16層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。17-18層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。19-20層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。21-22層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。23-24層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。25-26層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。27-28層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。29-30層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。31-32層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。33-34層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。35-36層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。37-38層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。39-40層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。41-42層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。43-44層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。45-46層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。47-48層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。49-50層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。51-52層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。53-54層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。55-56層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。57-58層に白い風化物質を多く含む。

黒褐色土：炭酸鈣を主とする。59-60層に白い風化物質を多く含む。

土層C (II区)

第7図 土層B北側 (1/20)・土層C実測図 (1/40)



Fig3 1022近世初頭生活面（北西から）

石は右側の列が火災後、左側が火災前。礎石と根石が混在するが火災前後で同じセットが30cmほどズレて並んでおり、火災後には同じ場所に同様の建物を建てたことが分かる。土師壺、皿埋納も近い場所から出土した。



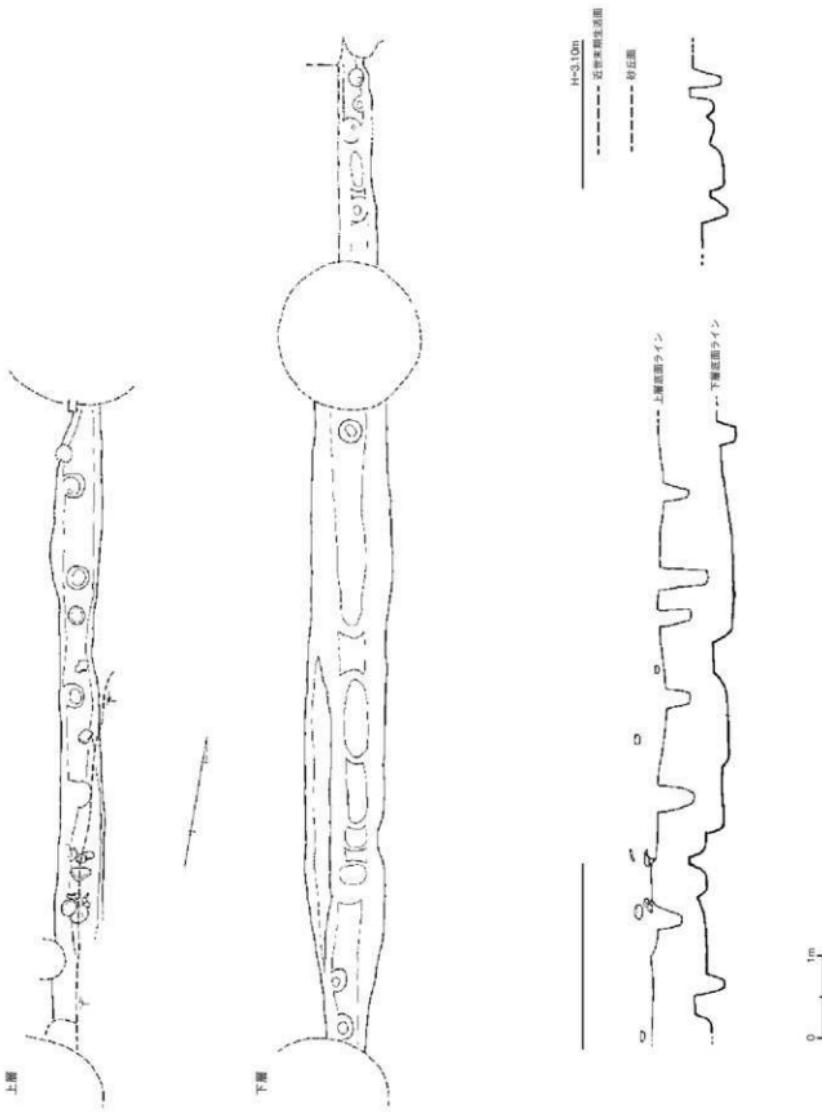
Fig4 炭化物層露出状況（下に砂と赤土の盛土層が見える）



Fig5 土層C（II区北側盛土）



Fig6 1区盛土赤土層露出状況（赤土がない部分は遺構・擾乱により削平されている）



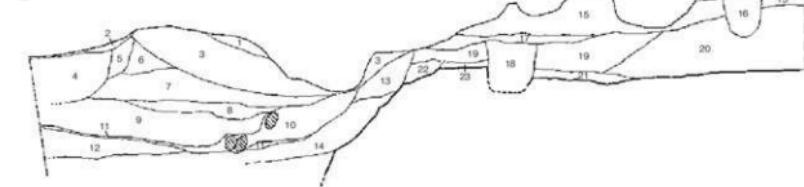
第8図 SD2067 実測図 (1/60)

土層D(Ⅱ区)

東

H=2.80m

西



0 1m

- 1. 黄褐色土
- 2. 褐灰砂質土
- 3. 褐色土・赤色土ブロックを埋め状に2層含む
- 4. 灰黃砂質土
- 5. 灰褐色土
- 6. 灰色土
- 7. 灰色土・粗粒多く含む
- 8. 灰色土
- 9. 黄褐色砂・粗粒と細粒の互層
- 10. 褐色細粒土・炭化物と燧土を含む
- 11. 灰色粘土
- 12. 灰色土
- 13. 褐色砂質土・赤土ブロックを含む
- 14. 褐色土・燧土・瓦・陶器等類、土器類を多量に含む
- 15. 褐系褐色土・炭化物含む
- 16. 褐系褐色土
- 17. 褐色砂質土・赤土ブロック含む
- 18. 粗粒土
- 19. 粗粒土
- 20. 粗粒土
- 21. 褐褐色砂質土
- 22. 褐褐色砂
- 23. 黑褐色砂質土・田表土

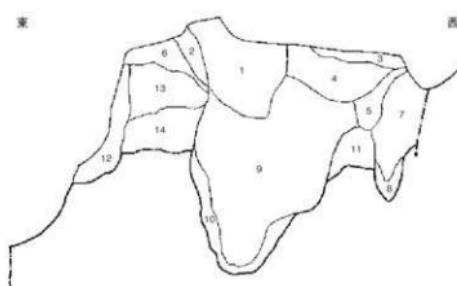
第9図 土層D実測図(1/40)

SD2067土層

東

H=2.70m

西



- 1. 灰色土・炭化物小片含む
- 2. 褐褐色土・汚れた赤土
- 3. 灰色土
- 4. 黄褐色砂質土
- 5. 灰色土
- 6. 粗粒土・赤土・近畿初期盛土か
- 7. 灰褐色砂質土
- 8. 褐系褐色砂質土
- 9. 粗粒土・赤土ブロックを多量に含む
- 10. 褐系褐色砂質土・8壁に似る
- 11. 褐褐色砂質土
- 12. 褐褐色砂質土・SK3000壁上
- 13. 褐色砂質土・赤土と砂を混ぜたもの
- 14. 灰褐色土・赤土と砂を混ぜたもの
- 15. 棕色砂質土・赤土と砂を混ぜたもの

第10図 SD2067 土層実測図(1/20)



Fig7 SD2067土層（北から）

（第10図、Fig7）、最初（第8図下層）は最大で深さ1.3m、掘り返し後（第8図上層）は深さ50cmを測る。下層では底面に凹凸や柱穴状の掘り込み、上層では柱穴と根石が並ぶ。遺構番号は上層が2067、下層が2087、I区では1071である。上層の柱穴の間隔は50cm～150cmと様々で柱穴径は22～32cm、深さは28～52cmを測る。溝底面で柱穴や根石が並んでおり塙であった可能性があるが、開口が狭い短冊形の町家は隣家と壁が接していて塙が無いことから、盛土工事に伴う施設である可能性がある。出土遺物（第18図028～032）。028は陶器擂鉢、029は土師皿で復元口径10cmを測る。030は白磁碗V類で、古代末の遺物である。031は丸瓦、032は平瓦で共に土師質である。

SD1060（第14図） 調査区東縁中央部に位置する東西方向の溝である。幅約1m、深さ13cmを測り、西側を搅乱に削平されて遺存長は1.4mである。溝の北側が一段低くなっている、10～30cmの角礫が並ぶ。この石は表土剥ぎにより若干動いている。調査区内ではこの溝から南では焼土ブロック整地層がみられないこと、これから北側では近世に廻る井戸が見られないことからなんらかの区画溝と考えている。南側の武家屋敷との境か町家敷内の区画かは明らかにできなかったが、担当者としては雨落ち溝のような役割であり、町家内における建物の南端を示すものと考えている。

SD1086（第5図） I区南東端に位置する東西方向の溝である。SD1060の5m南を平行する。幅18cm、深さ7cmを測る。焼土等を含まず火災前の掘り込みである。

SX2115（第14図） SD2067の西側に沿う南北方向の石組みである。搅乱のため本来の規模などは不明である。現状では20cm程の石が一部2段積みで長さ80cm程並ぶ。

SD2100（第4図） II区2面で検出した東西方向の溝でSD1060の南8mに位置する。幅35cm以上、確認できた長さは1m程である。

3) 祭祀遺構（第11図 Fig8~13） I 区は攪乱の削平で遺構が島状に遺存しているがその1つ（1022）と周辺で土師壺・皿埋納遺構が4基出土した。そのうち3基は土師壺を合口に上下重ねたのもので地鎮のための祭祀と考えられる。いずれも壺の内容物は残っていない。

SX1040（第11図） I 区1022に位置する。壺の下に炭化物層があり、火災後の埋納である。掘方は径25cmの円形で、断面は浅皿状で深さ6cmを測る。土師皿2枚が出土した。本来は合口だったと思われる。出土遺物（第13図）。001は径9.1cm、器高1.7cm、002は径9.8cm、器高1.7cmを測る。

SX1057（第12図） I 区南西端に位置し平面楕円形で長径48cm、深さ18cmを測る。床面直上で土師皿が1枚出土した。003は口径9.3cm、器高1.3cmを測る。口縁と内底に煤が付着する。

SX1065（第11図） 1022に位置する。赤土層に掘り込まれており、火災前の埋納である。掘方は平面不整形で径23×19cm、深さ6cmを測る。合口で上の土師壺は土圧のため割れていた。出土遺物（第13図）。004は口径14.5cm、器高1.7cm、005は口径14.0cm、器高1.7cmを測る。

SX1076（第11図） 1022に位置し、掘込みは無く砂丘上の薄い炭化物層上に皿2枚を合口にし、瓦と共に置かれていた。土師皿の上に赤土層が被っており城下町造成時の遺構である。出土遺物（第13図）。006は須恵質平瓦片で斜格子のタタキを施す。007は口径8.4cm、器高1.5cm、008は口径9.0cm、器高1.65cmを測る。

SX1094（第12図） I 区南東端に位置する。初期盛土層を掘下げ中に土師皿が1枚出土した。城下町造成中の遺構で南側石組みとの関係は不明である。009（第13図）は口径9.7cm、器高1.6cmを測る。

SX2028（第12図） II 区北東側に位置する。径1.8×1.7m、深さ24cmの土坑から完形の土師皿8枚とその他陶磁器類が出土した。火災後の土坑で陶磁器類は埋納時に混入したものである。出土遺物（第13図）。010~017は土師皿である。011、012、016は口縁に煤が付着している。018~020は白磁、021~023は染付、024~027は陶器で、027は被熱のため一部黒色化している。

SK1052（第15図・Fig17） 調査区北東側に位置する。平面は南北に長い長方形で両端を攪乱に切られる。現状で長径145cm、短径86cm、深さ59cmを測る。埋土に焼土、炭化物を多く含む火災後の遺構である。底面から13cm上で青銅の柄の刀子1点とアワビ2個が出土した（第15図・Fig17）。そのうち1点は殻長15cmを測る。陶器の皿もほぼ完形である。祭祀土坑か。出土遺物（第18図033~036）033・034は陶器皿で釉は灰色を呈す。036は刀子で柄は青銅製である。遺存長23.6cmを測る。刀身と柄の境は鋸に覆われ不明だが矢印付近である。柄に太さ1mm程の鋼線で径12mm前後の円を作つて貼り付けている。現状で3個見えているが詳細は鋸のため不明である。035は同安窯系青磁碗小片である。

4) 土坑

SK1007（第15図） I 区1面南西に位置する。平面は楕円形を呈し長径91cm、短径75cmを測る。断面は逆台形で深さは84cmを測り盛土層を抜いて砂丘面に達する。掘方の上部は砾と玉石、中層から下層は砾や瓦片を多量に含む。焼土を含まず近世初期の可能性がある。盛土中の赤土層により水捌けが悪いため生活排水用の土坑の可能性がある。

SK1021（第16図） I 区1面中央に位置する。西側を攪乱に切られ現状で南北160cm、深さ120cmを測る。埋土中に多量の角砾を含む。焼土ブロックを多く含むことから火災後の廃棄土坑である。出土遺物（第18・19図037~045）。出土遺物のうち陶磁器片はいずれも小片で接合しない。037は土師皿で復元口径9.4cm、器高1.3cmを測る。038は青磁香炉、039は陶器捕鉢。瓦片が多く軒瓦も1点ずつ（040・041）含み、壇（042土師質）も1点出土した。043は陶器大甕、044・045は瓦質鉢である。

SK1032（第16図） I 区1面南東に位置する。東西両側を攪乱で切られている。現状で南北120cm、

1040

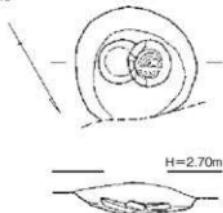


Fig8 1040 (北から)

1065

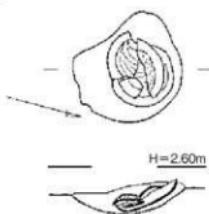


Fig9 1065 (南から)

1076

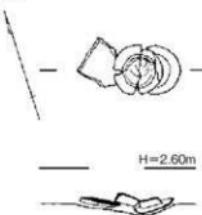


Fig10 1076 (南から)

0 30cm

第11図 祭祀遺構実測図1 (1/10)

1057

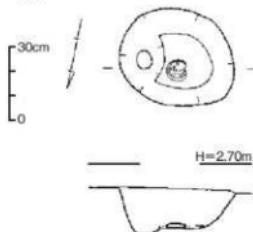


Fig11 1057 (北から)

1094

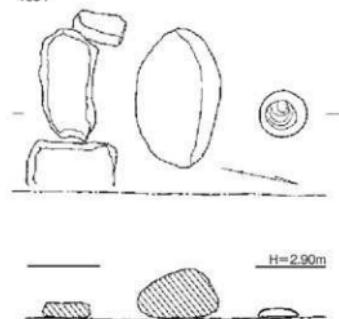


Fig12 1094 (北西から)

2028

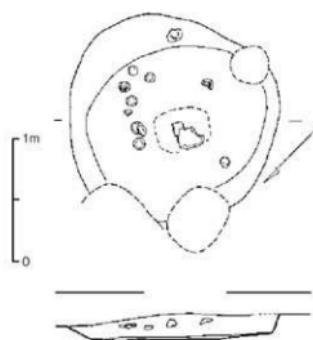
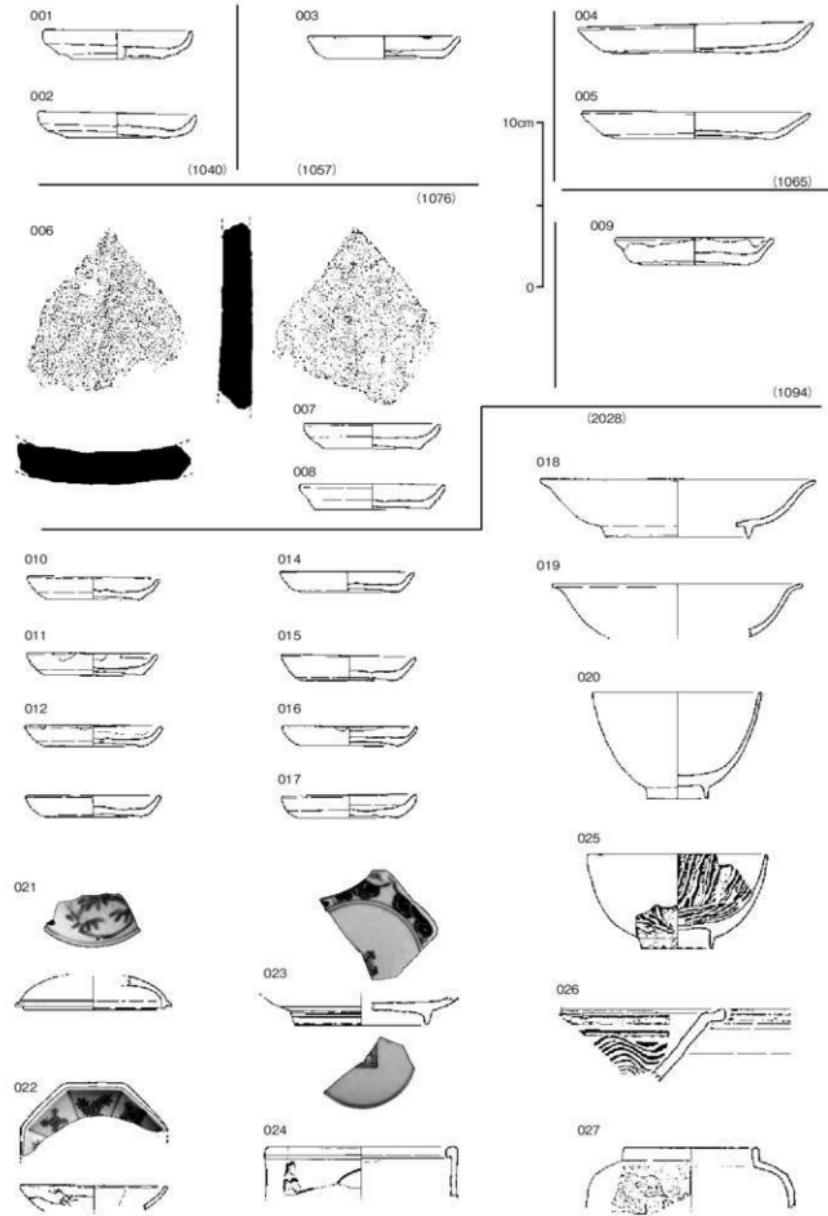


Fig13 2028 (東から)

第12図 祭祀遺構実測図2 (1/10・1057は1/20・2028は1/40)



第13図 祭祀遺構出土遺物実測図 (1/3)

SD1060

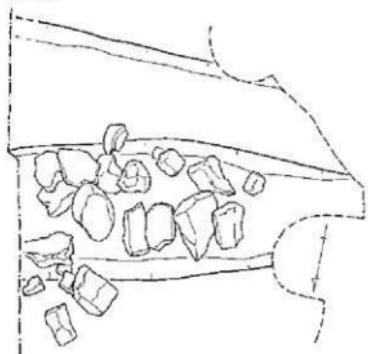
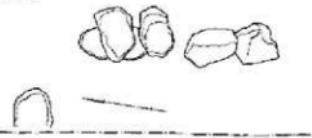


Fig14 SD1060 (北から)

H=2.60m



SX2115



H=2.60m



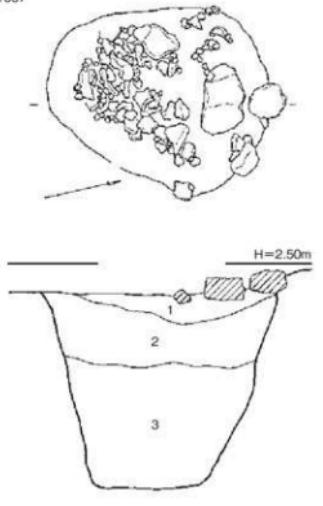
Fig15 2115 (北から)

0

50cm

第14図 1060・2115実測図 (1/20)

SK1007



0 50cm



Fig16 SK1007 (東から)

1. 数個の種と瓦片の間に小円窓が詰まっている
2. 大きな瓦片を多量に含む
3. 多量の角鏡に少量の瓦片を含む

SK1052

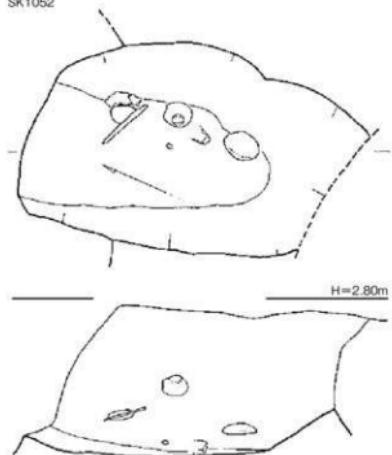
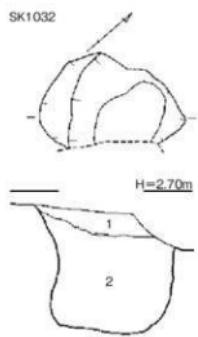
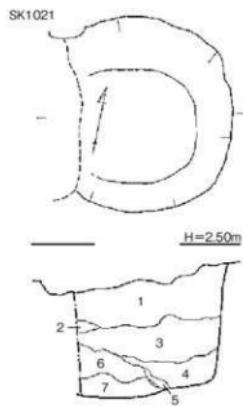
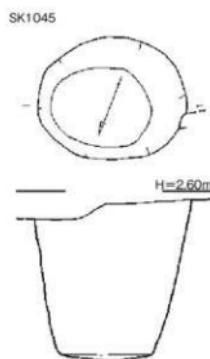


Fig17 SK1052遺物出土状況（北西から）

第15図 1007・1052実測図 (1/20)



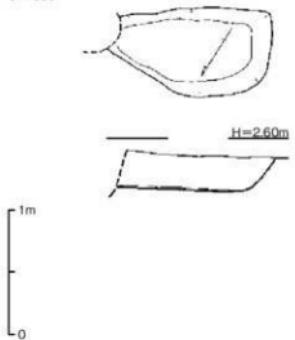
1. 褐褐色土 塗土・灰化物小片を多く含む 黄色紗を層状に含む
2. 黄色紗 黄土と黄色紗の互層 層の厚さは2~30mmでわずかにレンズ状を呈す。灰化物小片を含む



0 1m

第16図 土坑実測図1 (1/40)

SK1039



SK2050 [2049]

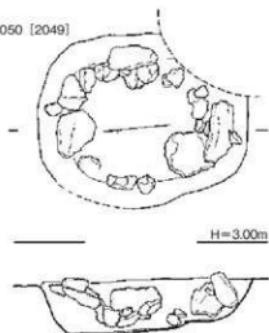


Fig21 SK2050 (西から)



Fig22 SK2074 (西から)

SK2074

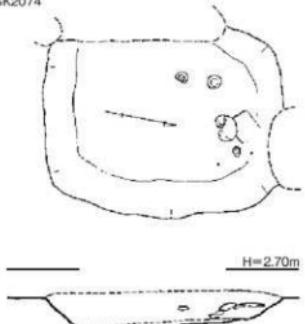
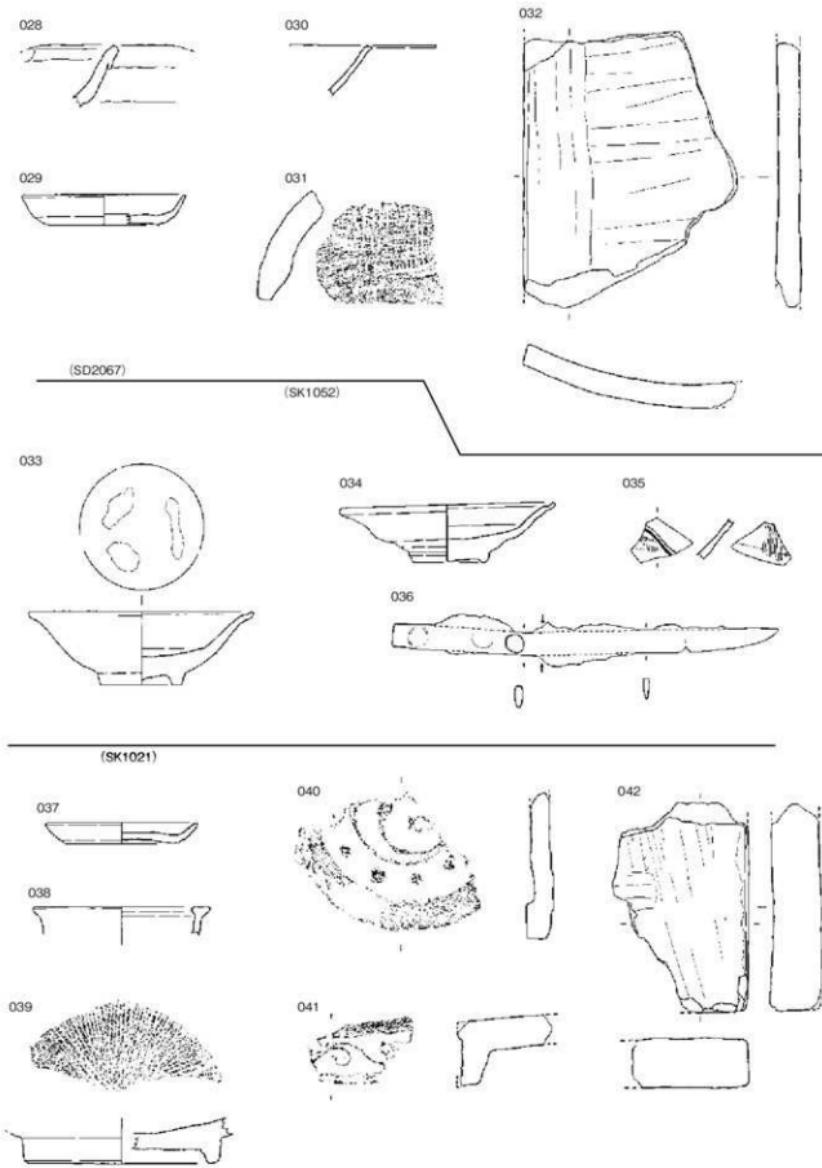


Fig23-1 SK2074魚骨出土状況

Fig23-2 SK2074エイ・サメ類椎骨出土状況

第17図 土坑実測図2 (1/40)



第18図 土坑出土遺物実測図1 (1/3)

深さ98cmを測る。上から20cmは焼土ブロック層で、下層は焼土ブロックを含まない黄色砂を主体としており、火災時には埋まりかけていたものである。出土遺物（第19図046～053）。046～048は染付、049・050は土師質の瓦、051は土師質で全体にナデを施す。瓦に似るが不明土製品である。052は土師皿で口径8.7cm、器高1.3cmを測る。底面に15×5mmの穴があり、口縁は両面に煤が付着する。053は青銅鏡で径9.8cmを測る。1.3cmの鋏がつく。052・053から祭祀・埋納遺構と思われる。046～051が遺構に伴うのか、埋め戻しに伴う混入かは不明である。

SK1039（第17図） I区1面中央に位置する。現状で東西186cm、南北71cm、深さ27cmを測る。火災前の遺構か。出土遺物（第20図）。054は土師皿で復元口径6.6cm、器高1.4cmを測る。055は陶器甕口縁である。釉は茶褐色を施す。056は土師質蓋で口径16.8cmを測る。灰茶～黒褐色を呈し、胎土は淡橙色である。内面は横ハケ、外面は口縁が回転ナデ、つまみ周辺は指ナデを施す。つまみに成形後に棒を突き刺して径6.5mmの孔を穿つ。

SK1045（第16図） I区1面南側に位置する。平面楕円形で123×101cm、深さ113cmを測る。焼土等を含まず火災前の遺構か。出土遺物（第20図057～059）。057は白磁皿、058は陶器椀、059は擂鉢である。

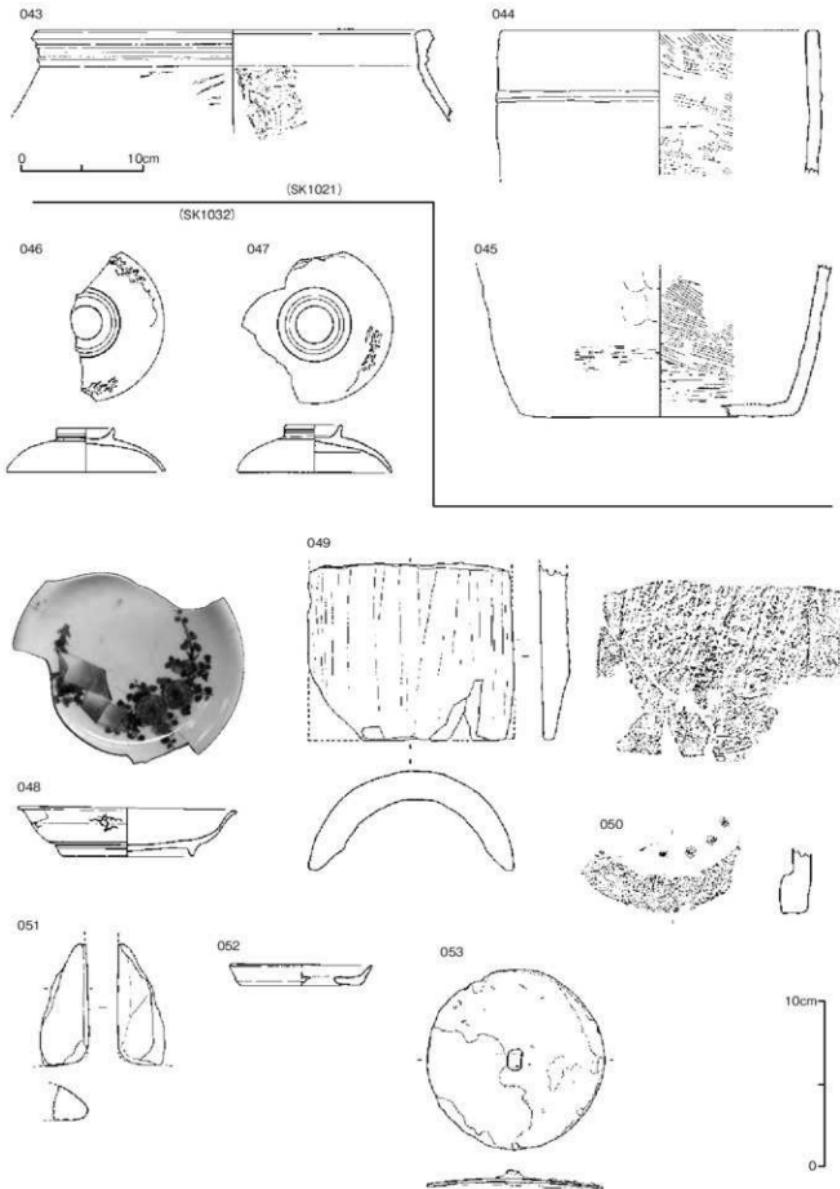
SK2006（図版5-1） II区南東隅に位置する。平面は隅丸長方形で長径110cm、深さ90cmを測る。遺構内は瓦片がびっしり詰まり、陶磁器、土器片はほとんど出土しなかった。完形の瓦はなく、被熱した破片も数点みられたが、埋土中の焼土ブロックは少量である。

SK2050（第17図） 調査区南西端近くに位置する。掘方平面は隅丸長方形を呈し、長径173cm、短径140cm、深さ42cmを測る。板石を立てた約1.4×1mの石室である。板石の根元は10～20cmの礫で固めている。擾乱によりほとんどの板石が動いており正確な規模は不明である。地下式貯蔵庫と考えられる。染付碗小片、陶質擂鉢、須恵質瓦、土錦などが出土した。

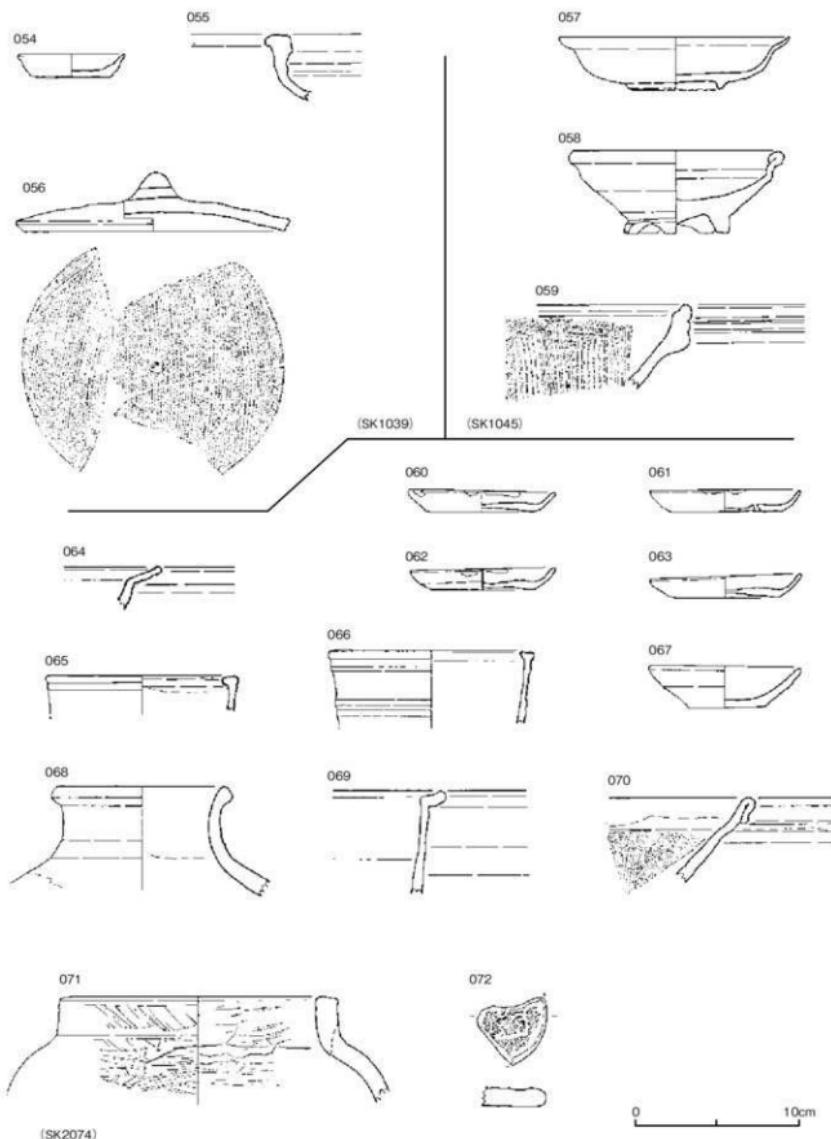
SK2074（第17図） 調査区中央西側に位置する。平面は隅丸方形で長径196cm、短径163cm、断面は浅皿状で深さ38cmを測る。土師皿が數枚出土した他にサメ・エイ類の椎骨や魚類の鱗（Fig23）などが出土した。廃棄土坑である。出土遺物（第20図060～072）。060～063は土師皿で063以外は口縁に煤が付く。064～066は青磁、067は陶器皿で暗赤色～黒褐色を呈し、口縁部から外面の一部に煤が付着する。068～070は陶器、071は土師質壺で072は塩焼壺の蓋である。

SK2030（図版4-1） II区南東端に位置する廃棄土坑である。埋土に焼土を含み火災に伴う廃棄土坑の可能性がある。埋土中から陶磁器が多く出土した（Fig24は磁器で陶器が5点ほど混入している）。出土した磁器は多種にわたる。特に染付が多いがFig24のAは花生けで1点のみ出土、皿類は多くB～Fでは同一のものが10点以上出土し特にFは20枚以上出土した。Gは染付大皿で径45cm程、Hは青磁香炉で径14.1cmを測る。Iは青磁の杯、Jは染付の碗でこの2点は表面が熱のため発泡している。Kは白磁皿で同一のものが10枚ほど出土したが、目跡、疊付きの露胎部分に炭化物がこびりついており、火災を示すものと思われる。この他陶器類も椀、皿、壺、甕などを主に多く出土した。

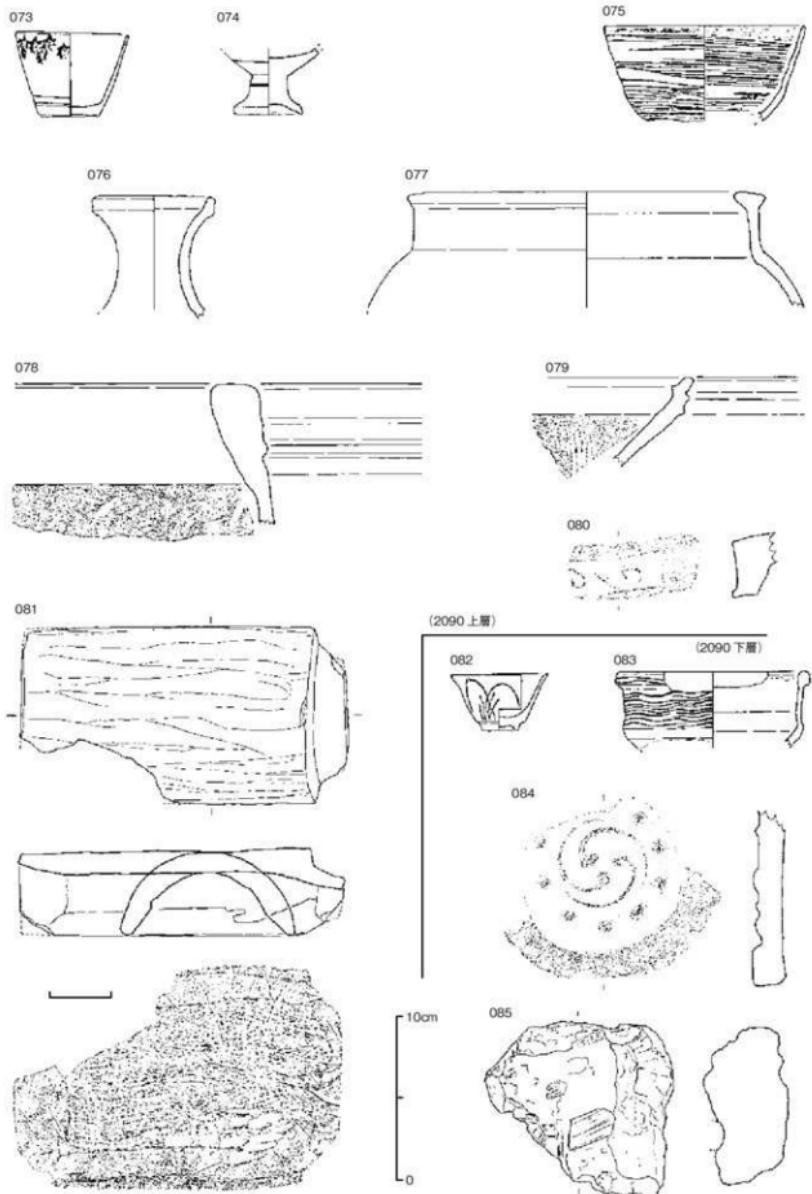
SK2090（図版4-2） II区南端に位置する。平面形は不整形で南端は調査区外に延びる。現状で東西4m、南北5mを測る。深さは約1m掘りさげたところで湧水点に達したため、それ以上の掘り下げは中止した。出土遺物は多量の陶磁器や土器片、瓦片と共に焼土や炭も多く出土した。陶磁器片や瓦は被熱したものが含まれ、火災による破損品の廃棄土坑と思われる。出土遺物（第21図073～085）。073は染付、074～079は陶器で076は発泡している。080は瓦質軒平瓦、081は土師質丸瓦で長さ26.7cm、幅14.3cmを測る。若干被熱した痕跡がある。082・083は陶器、084は瓦質軒丸瓦である。085は焼土塊で木舞孔の痕跡がある。土壁が火災で被熱したものか。



第19図 土抗出土遺物実測図2 (1/3・1/4)



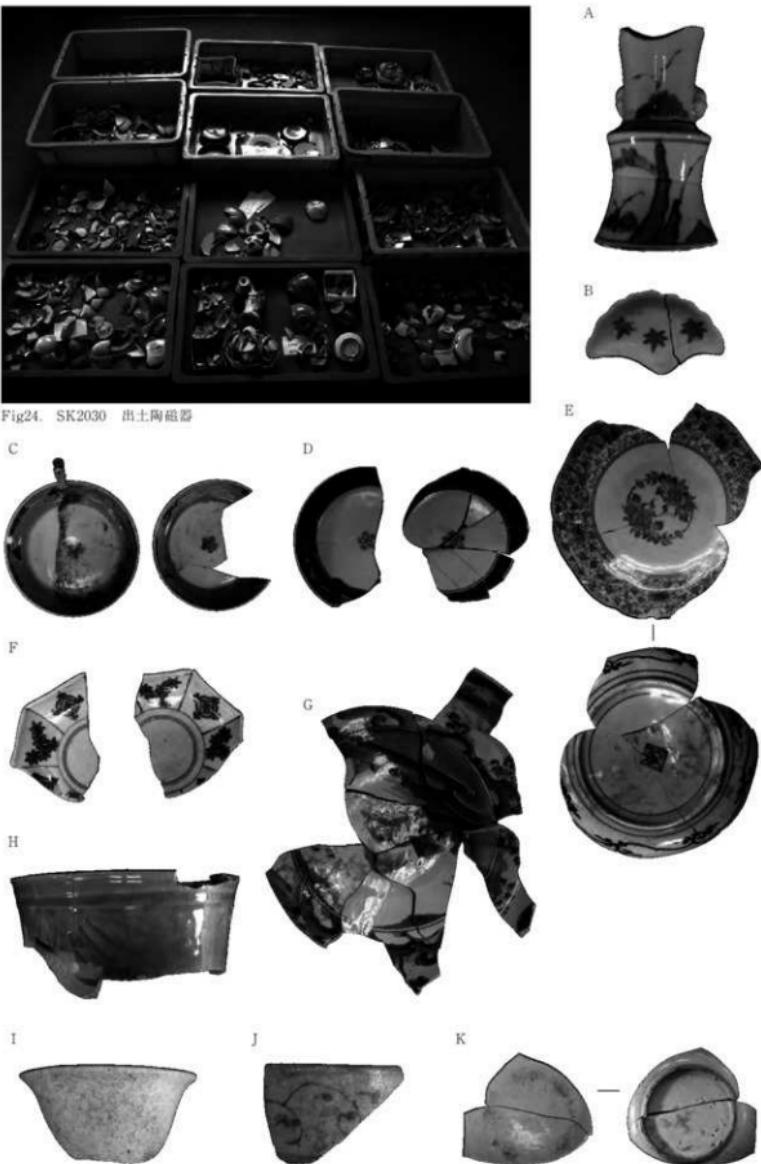
第20図 土抗出土遺物実測図 3 (1/3)

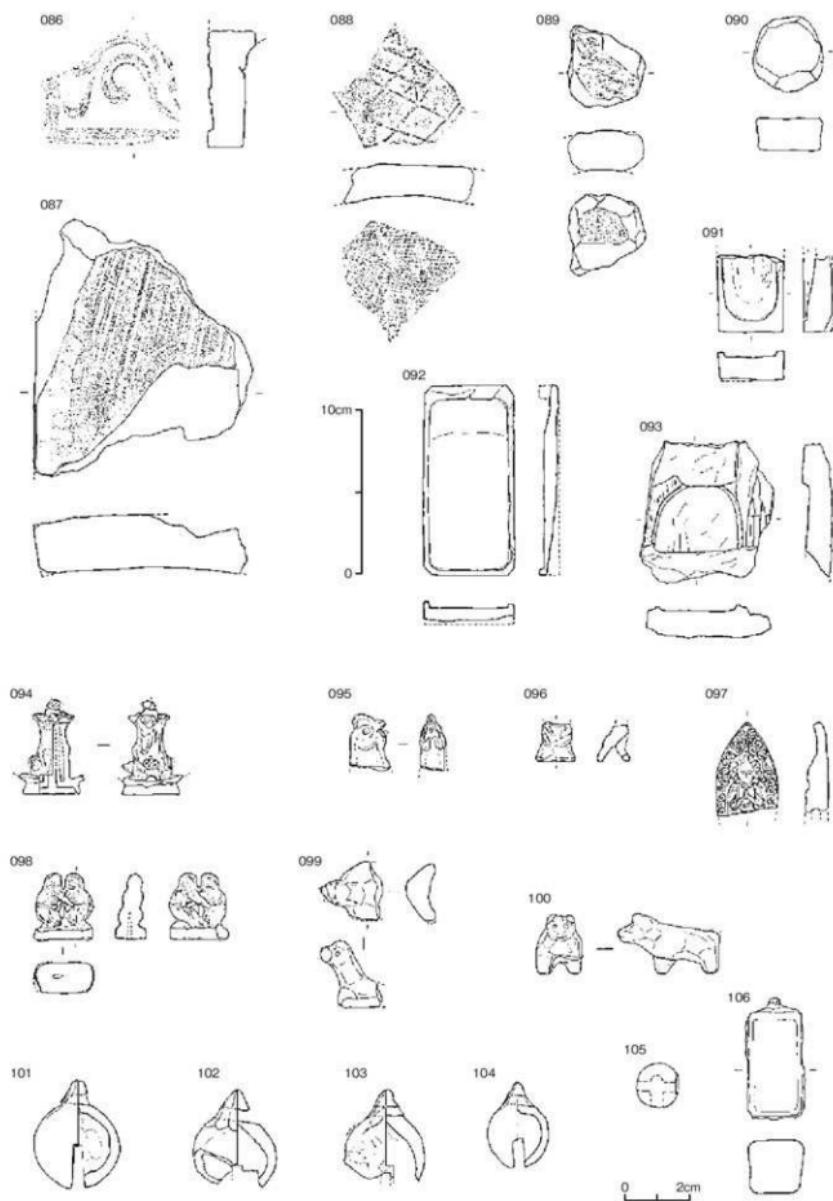


第21図 土抗出土遺物実測図4 (1/3)



Fig24. SK2030 出土陶器





第22図 その他の出土遺物 (1/3, 105・160は2/3)

その他の出土遺物（第22図） 遺物番号右側の（）は出土した遺構番号である。086～090は瓦で086は軒平瓦片である。須恵質で草花文を施す。中世に属する。088・089は須恵器平瓦で古代末から中世か。090は瓦玉である。091～093は石製硯で091は赤間石製である。094～096は白磁で094は台から上は二重構造である。中央に棒を刺すための筒があり、空洞をはさんで外側は梅樹で下に3、上に4の花が咲き、頂上には小鳥が載る。095は鶏頭の水注、096は袖の広い服を着た男性で、尻に固定するための穴があく。097～100は土製品で、他にも不明な小片が多く出土した。101～104は土鉢である。小片含めると30点以上出土した。大きさは径が5cm前後と3～4cm前後の2つに別れる。105は白磁の玉で径13mmを測る。T字に穿孔があり、数珠の親玉と思われる。106は銅権である。高さ37mmを測る。砂が付着しているため正確ではないが、現状で54.5gを測る。

獸骨はマダイやエイ・サメ類、カキの他に巻貝が10点ほど出土したが、多くは軸柱のみで同定できたのはザザエ2点とアカニシ1点のみである。マダイは前頭骨が中央で骨割りにされていて煮物にされたものと思われる。

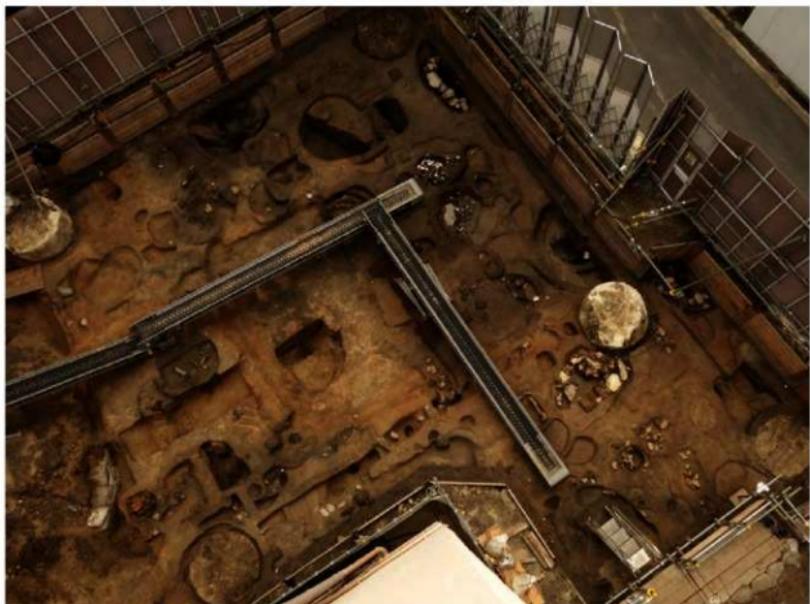
小結 敷地は近世に呉服町と呼ばれた町家で、南北に細長い地割りは近世の様相を残している。敷地の南辺は武家屋敷域との境界である。これまでの調査が武家屋敷域の調査であったのに対し、初めての町家の調査ということで建物の構造や南側武家屋敷との境界線の検出などが期待された。南側武家屋敷との境界は東西方向の堀で、調査で検出されるのは下部構造の溝状の掘り込みとなるが、調査区内で検出した東西方向の溝（SD2100など3条）は幅が20～30cm程で武家屋敷との境界にふさわしくないため、武家屋敷との境界は南側の敷地外になると考えられる。

SD1060の北側では現代のコンクリート井戸が1基あったのみで近世に週る井戸が1基もないことや南側では焼土ブロック整地層が見られないことから、SD1060の北側は町屋の建物部分にあたり床に覆われているため井戸を掘るスペースがとれず、また床で見えないため焼土はそのままにされたと考えている。SD1060から南で井戸が全面に広がるのは、根石なども出土したため建物は建っていたものの、井戸を掘り直すスペースがあったためであろう。建物の後側に採光・通風のための空間を設けた例が多い。

今回の調査では火災後と思われる焼土層2面と区画溝であるSD2067を確認した。調査結果から北側では火災後焼土ブロック整地層の上にそのまま建物を建てたことやほぼ同じ場所に同じような建物を建てたことが判った（Fig3）。SD2067は福岡城下町を作ったときの堀（柵）と思われるが、堀の東西で盛土の工法が異なることから盛土工事の分担区分を示している可能性もあるが、わざわざ堀（柵）を作り、その後も少なくとも1回は作り直していることなど不明な点が多い。今後周辺の調査により、町作りや町家についての調査が進むことを期待したい。



1. I 区全景（西から）



2. II 区1面（南西から）



1. 1035礎石（近代）



2. I 区砂丘面（赤土を剥いだ状態）



1. II区南西隅グリ石並び状況（北から）



2. II区南西部盛土（赤土に砂を混ぜたもので上半は土壤化している）



1. SK2030遺物出土状況（南から）



2. SK2090土層（北東から）



1. SK2006土層（南から）



2. SE2120・2121掘り下げ状況（北西から）

図版 6

1. SD2067 (北から)



2. II区3面目調査トレインチ トレインチの左壁が土蔵C (南から)



報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行年月日	ふくおかじょうかまち 3 福岡城下町3 福岡城下町遺跡第3次調査報告 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1462集 屋山洋 福岡市教育委員会 福岡市中央区天神1丁目8-1 2022年3月24日						
ふりがな 所取遺跡名 ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因	
ふくおかじょうかまち いせき 福岡城下町遺跡	40133 279番、280番	2888	33° 61' 42'' 65° 45''	130° ~ 20190610 20190913	319 m ²	ホテル建設	
種別 集落	主な時代 近世~近代	主な遺構 井戸・溝・土坑	主な遺物 近世陶磁・瓦質土器・ 土師質土器・瓦・動 物遺存体	特記事項 城下町造成時の盛土と 18世紀前半の火災の 痕跡を確認できた			
要約	福岡城下町遺跡は福岡城北側の砂丘上に位置する。3次調査地点は福岡城下町の復元図によると南側の武家屋敷地区と北側の町家地区の境界に位置する。遺構はII区北側ではかなりの削平を受けていたが、江戸時代初頭の盛土や生活面、地鎮遺構の他に18世紀代の可能性がある火災に伴う整地層などを確認した。II区南側（敷地中央部）では火災による整地層は確認できなかった他、多数の井戸や土坑が切り合ひなど北側とはかなり様相が異なっていた。II区はII区南半同様に多数の井戸と土坑、溝のほか火災に伴う廃棄土坑などを確認した。火災に伴う廃棄土坑は南側は調査区外に及び、調査区内では4x5mを測る。溝は南北方向で幅80cm、深さ1.3mを測る。調査区の南端からII区中央部まで確認した。底面で径15cm程の杭の痕跡を数ヶ所確認した。この溝の東西では遺構の分布、盛土に使用した土などが異なるため、区画溝の可能性が考えられる。遺物は廃棄土坑から多量の瓦の他に陶磁器、瓦器等が出土した。瓦が最も多く、瓦質や土師質の火鉢や鍋も多く出土しているが、陶磁器片は數ヶ所の土坑から集中して出土した以外は少なかった。調査区の北側、中央、南側、東西側とそれぞれ盛土方法や遺構の分布が異なっており、近世の土地利用などを示す上で重要である。						

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1462集

福岡城下町3

-福岡城下町遺跡第3次調査報告-
令和4(2022)年3月24日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 三栄印刷株式会社
福岡市博多区千代1丁目6-1

• 100 • 99 • 98 • 97 • 96 • 95 • 94 • 93 • 92 • 91 • 90 • 89 • 88 • 87 • 86 • 85 • 84 • 83 • 82 • 81 • 80 • 79 • 78 • 77 • 76 • 75 • 74 • 73 • 72 • 71 • 70 • 69 • 68 • 67 • 66 • 65 • 64 • 63 • 62 • 61 • 60 • 59 • 58 • 57 • 56 • 55 • 54 • 53 • 52 • 51 • 50 • 49 • 48 • 47 • 46 • 45 • 44 • 43 • 42 • 41 • 40 • 39 • 38 • 37 • 36 • 35 • 34 • 33 • 32 • 31 • 30 • 29 • 28 • 27 • 26 • 25 • 24 • 23 • 22 • 21 • 20 • 19 • 18 • 17 • 16 • 15 • 14 • 13 • 12 • 11 • 10 • 9 • 8 • 7 • 6 • 5 • 4 • 3 • 2 • 1